

# オウレン

牧 幸 男

表題は「オウレン」であるが、主として「キクバオウレン」の変種「セリバオウレン」を中心に記述した。

「立春」私はこの言葉が大好きである。暦のうえでの春であるが、まだまだ寒さは厳しく、それでも、寒さの底から日々暖かくなってゆく兆しを感じられるからである。日ざしも伸び始め、一陽来復を強く感じる頃となる。まもなく本格的な春の訪れである。春を待ち焦がれるのは人間だけでなく、早く花を咲かせようとする植物もある。厳しい季節に花をつける植物のひとつに芹葉オウレンがある。花期が早いので、この植物の花の咲く姿に出会うことがあまりない。海拔1,400mの上田市長野県薬剤師会薬草の森りんどう（長野県菅平薬草栽培試験地）では芹葉オウレンが3月中旬に咲いている。但し、ミツバオウレンの花期は7～8月である。

セリバオウレンは山地樹林下のやや湿り気のある所に生育する雌雄異株のキンポウゲ科の常緑多年草。根茎は黄褐色で内部は黄色、多数のひげ根を出す根生葉は、はっきりした柄で2回3出複葉（オウレンは1回3出複葉）、各々は更に分裂して鋭歯牙縁がある。雌雄異株。早春10cmぐらいの花茎を出し、白色の柄のある花を互生して、その先端に直径1～1.5cm程の白色の花を2～3互生、花柄は花がすむと5～10cm程伸び、先端、立派な「<sup>たいか</sup>袋果」\*を輪状にたくさん付ける。日本固有種で古来、需要の多い薬用植物である。分布は北海道西南部から本州、四国である。

**注\***：袋果は、果実の1型で、1枚の心皮(雌しべを校正する葉的要素)からなり、成熟した果皮はふつう乾燥しており、1本の線に沿って裂開する果実のことである。

春、地上は枯れ草に覆われているが、黄連は葉が濃緑色のため注意していると見つけやすい。私たちは、花期時期が早いためか、あるいはまだ花が咲く植物はないだろうとの先入観から花期を知らずにいることが多い。少し暖かくなった頃、輪状に付いた袋果を見て、今年も花が咲いたのかと知る地味な植物である。決して珍しい植物ではないが、花の咲く時期が里では2月頃から、山では種類により差があり3～7月頃で湿気のある樹下に咲く。薬用植物に感心を持つ人にとって、黄連は重要な植物であるが、一般の方にはあまり膾炙されていない植物であろう。

植物学的には地味だが『神農本草経』（250～280編纂）上品に収載され、古来から消炎、止血、瀉下等の要薬として汎用されてきた。我が国では奈良時代に中国の黄連使用の知識が伝わり、自国に生育する黄連と同じと考え、各地に産する黄連を利用していった。数少ない日本特産の薬用植物といえる。



セリバオウレンの花



セリバオウレンの袋果

古い記録では『播磨国風土記』（713以降）に記述がある他『本草和名』（918）や『延喜式』（905～927）にも登場している。特に、『延喜式』には信濃を初め12か国から貢進されたと示されており、昔から主要な生薬であった。また、江戸時代には取引量が増え、享保年間（1716～36）には栽培が始まった。一般に、日本の黄連は基原的には異なるが良品されている。この事実は、貝原益軒の『大和本草』（1709）に「日本の黄連性良し、故に中華、朝鮮に日本から多く渡る。中華の書に日本産黄連を良し」とする記述があり輸出されていたことが分かる。今日でも栽培は各地で行なわれており、長野県では長野県林業総合センター試験場、長野県農業試験場でも過去に行なわれていた。黄連が身近な植物であったことは、各地に黄連や黄連沢の地名が残っている。八ヶ岳には周辺の黄連が自生していたことから1950年創業の名称「八ヶ岳オーレン小屋」がある。この小屋は、八ヶ岳の夏沢峠の近い茅野市豊平2472、季節になると高山植物の黄連の花が登山者を迎えてくれるとガイドに書いてある。

日本産のオウレンは小葉の切れ込みによって、1回3出複葉のキクバオウレン *C. japonica* Makino var. *japonica*、2回3回出複葉の芹葉オウレン *C. japonica* var. *dissecta* Nakai、3～4回3出複葉のコセリバオウレン *C. japonica* var. *major* Satake と3変種がある。『新編牧野新日本植物図鑑』には、オウレン *Coptis japonicus* var. *japonicus*、ミツバオウレン *Coptis trifolia*、バイカオウレン（ゴカヨウオウレン）*Coptis quinquefolia* とセリバオウレン *Coptis japonicus* var. *dissecta*、ミツバノバイカオウレン（コシジオウレン）*Coptis trifoliolata* の5種



ゴカヨウオウレン（葉に注目）

が記載されている。その他、菊葉オウレン、小芹葉バオウレン存在する。私は屋久島を訪れた時、屋久島固有種のオオゴカヨウオウレン（大五加葉黄連）*Coptis ramosa* (Makino) Tamura に出会った事があった。

古い時代から薬用に使われていたが、詩歌に詠われるのは、明治以降が多い。

尼寺は みんなの夜の 色ならぬ 黄連さきぬ 秋ちかき日に 与謝野晶子  
黄連や 意外に深き 根なりけり 井萍萍子

**植物名**の由来は、漢名の黄連に基づいたものとされているが、牧野富太郎博士は「元来、黄連の本当の品種はシナオウレン、一名トウオウレンのことで日本産のオウレンにこの漢名を適用するのは誤り。」と述べている。この黄連の名前の起原は『本草綱目』（1596）を著した李時珍は「根が珠を連ねた姿で、色が黄色だから黄連と名付けた。」と記述している。別名は、カクマグサ、カヤマクサなどがあるが、いずれも古い呼び方で、現在は使われていない。

**学名**は *Coptis japonica* で、属名の *coptein* は切るから転じた言葉で、日本に産し葉が分裂している植物の意味になる。

**薬用**は、根茎を用い生薬名を黄連、黄連末（いずれも『日本薬局方収載』）、磨黄連と呼んでいる。この磨黄連は<sup>みがきおうれん</sup>ひげ根、泥土を除去して1～2日干し、ヒゲ根の残りを火で焼いた後（毛焼き）、磨きかけ再び日干した生薬である。黄連の特徴は、収穫まで栽培品は6～7年、野生品は12～15年ぐらかかるので大変高価な生薬のひとつである。

良好な生薬としての黄連は、根茎がなるべき肥大し、横断面が鮮黄色を呈し平坦であることが望ましいとされている。

主たる利用は、漢方の要薬として上半身の炎症や充血、精神不安、健胃薬、食欲浴不振、消化不良の治療に応用されている。民間では、昔から根茎を煎じた液で眼病を治したり、吐血、喀血、外傷出血に利用してきた。

**その他**、黄色の染料として利用されることがある。

**花言葉**は「変身」、「揺れる心」である。